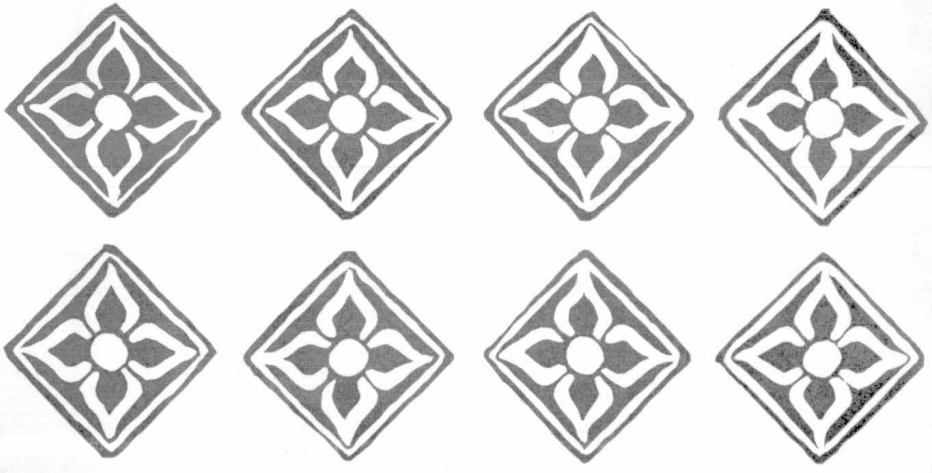
15

山本有三集

女の一生
路傍の石



日本文学全集

15

河出書房

日本文学全集 15

山本有三集

1966 ©

昭和四十一年三月一日 印刷
昭和四十一年三月三日 発行

定価 四八〇円

著者 山本有三
発行者 河出朋久
印刷者 山田三郎太
装幀者 亀倉雄策

印刷 凸版印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
本文用紙 神崎製紙株式会社
同納入 東邦紙業株式会社
クロース 日本クロス工業株式会社
同納入 東邦紙業株式会社

発行所 東京都千代田区神田小川町三ノ六 株式会社 河出書房新社
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京 一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

山本有三集

女の一生……五
路傍の石……三二七

注釈　稲垣達郎　四八七
年譜　高橋健二　四九六
解説　奥野健男　五〇五
口絵
挿画「女の一生」　中村研一
「路傍の石」　和田三造

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

山本有三集

女の一生

第一部

糸きり歯

一

允子（マサコ）は青い草の上にすわって、こころもちはれあがった左のほおをおさえながら、あお向いて、大きな口をあけていた。が、上を向いていると、空の緑が目にしみるので、彼女のまぶたは、ひとりでにふさがっていた。野の風が、おさげのリボンを軽くゆすぶった。うしろの大きな松のこずえで、うるさく鳴きしきっている油ゼミの声が、うずく歯にちりちり響いた。

允子の開いた口の上に、昌二郎（ショウジロウ）のほそ長い、白い顔がかぶさっていた。彼は人の口のなかを、こんなにはっきり見たことがなかった。口のなかって随分きれいなものだなあ、と思いながら、彼はサクラもちのあんを抜いてしまったあとの、あの柔かいモモ色のしん粉の皮を、すぐに連想した。あんを抜いた、モモ色のふわふわしたしん粉の内がわに、まっ白いアルヘイ糖を上下にずらりとならべたのが、なんのことはない、允子の口のなかだった。彼は、即座にたべてしまいたい衝動を感じた。

「何してんの。早くやってよ。」

允子は口をあいたままいった。

昌二郎は空想を破られたので、急にどぎまぎしながら、持っていたクギ抜きを、なんということなしに、二、三度がちがち鳴らした。

「どれだかよくわかんないんだよ。」

「これよ。――これだって、さっきからいっているじゃないの。」

允子は人さし指のさきを、痛む歯の上に持って行った。

「そら、こんなに動いてるじゃないの。」

「あ、そいつか。ずいぶん動くね。」

「動くだろう。こんなにぐらぐらしてるんだから、すぐ抜けるよ。――自分じゃ、どうしてもぐいとやれないから、昌ちゃん、やってよ、早く。」

「よし。――これだね。」

昌二郎は指で、下あごのおく歯の一つを押した。

「ううん。」

允子は「わかんない人ね。」という顔をしながら、昌二郎の指を払いのけ、口を曲げながら、ことさら、糸きり歯を彼のほうに突きだして、指さきでこれだと示した。

昌二郎は彼女のおさえている指の上に、自分の指をのせた。そして、彼女が指を引っこめたと同時に、クギ抜きを、その歯にあてがった。

「痛くない。」

允子は黙って首を動かした。

「いいか。引っぱるよ。」

彼は力をいれて引っぱった。しかし、はさみ方が悪かったせいか、引っぱるや否や、がちゃりとはずれてしまった。

「痛くない。」

「痛くないってば。」

允子は、口のなかにたまったつばを吐きだしながらいった。

「でも、痛そうな顔してるんだもの。」

「そりゃ痛いよ。歯を抜くんだもの。だけど、それっくらい我慢するから、思いきってうんとやって……」

昌二郎はうなずいて、クギ抜きをはさみ直した。そして、もう一度ひっぱったが、今度もすぐはずれてしまって、うまくいかなかった。

「允ちゃん、抜けないよ。まだ早いんだ。」

「早かないよ、ちっとも……」

「こんなことしなくったって、ほっとけば、ひとりでに抜けるったら……」

「いや、あたし。歯のぐらぐらしてるのなんか。——だめね、昌ちゃんは。」

「だって、うまくはさまんないんだもの。」

「はさまっても、ぐっと引っぱれないんだろう。——こわいの、昌ちゃん。」

「そんなこたあないけれど、おらあ、いやだ。——いろんなことというんなら、自分で抜いたらいいじゃないか。」

「自分でできれば、頼みゃしないじゃないか。昌ちゃんは弱むしね。歯も抜けないなんて。」

「おらあ、歯医者じゃないよ。」

昌二郎はクギ抜きのあいだに、自分の親ゆびをわざとはさんで、ぐいと締めつけながら、しかめ顔をして、つっけんどんに答えた。

「だれも、あんたを歯医者だなんて、いってやしないじゃないの。男のくせに、力がないって言ったんじゃないの。」

「そ、そんなこというんなら……」

「そんなこというんなら、何？」

「そんなこというんなら、ほんとうに、ぐんと引っぱってやるぞ。」

「え、引っぱってちょうだい。思いきり、ぐうんと。」

「泣いたって知らないよ。」

「あ、いいとも。」

「ほんとうだよ。ほんとうに力いっぱい引っぱるんだよ。」

「ああ、いいってば。どんなに引っぱったって。」

二

そこで、允子はまた大きな口をあいて天上を向き、昌二郎は大きなクギ抜きをかまえて、彼女のわきに立った。彼は指の先で、ぐらぐらする歯をたしかめてから、おもむろにクギ抜きを差しこんだ。前には、いつも、はさみ方が浅かったためにはずれてしまったから、今度はできるだけ深くおさえて、クギ抜きに、充分ちからがはいるようにくふうした。

「いいかい。引っぱるよ。」

「ああ。……」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

允子の返事は、口をあいているので、はっきり聞きとれなかった。

昌二郎は、軽くおさえていたクキ抜きのもとを、ぎゅっと締めて、力いっぱい引っぱろうとした。すると、その途端に、

「あ、いた、た！」

と、突然允子が悲鳴をあげた。

「なんだ。もう泣くのか。」

男の子は勝ちほこったように、允子を見おろした。允子のほおには、白い水たまが二、三滴、ぽろぽろころがっていた。

「そうれ見ろ。だから泣くっていうんだ。」

「だ、だって……」

允子は泣きながらいった。

「肉をはさむんだもの。……肉をはさまれれば、だれだって痛いじゃないの。」

彼女は昌二郎をにらみつけるような顔をしながら、人さし指の先を口のなかに持って行った。

「そら、こんなに血が出たじゃないか。意地わる！」

允子は指の先の赤いものを、彼の前につきつけた。

「わざとやったんだろう。あたしを泣かそうと思って……」

「わざとなんかやりゃしないよ。はずれないように深くはさんだんで、じゃ、肉にさわったんだ。」

「そんならもう一度。今度は肉をはさんじゃいやだよ。」

「大丈夫だよ。」

昌二郎はクギ抜きをはさみ直して、もう一度やった。クギ抜きがうまく歯にかかったと見えて、歯の根のあたりで、もりっという音がした。彼はその音でひやっとしたので、引っぱるのを急にやめてしまった。

「痛くない？」

「ううん」

允子は涙をぽろぽろこぼしているくせに、「ううん」といった。

「また少し血が出たね。」

「大丈夫だよ。」

「ほんとうに痛くない？」

「痛くないってば。——もうちっとだから、ぎゅっと引っぱって。」

「大丈夫かい。」

「大丈夫だってば。」

昌二郎はふたたびクギ抜きを糸きり歯にかけて、もりもりやった。もりもりやっている内に、何か、ごきんと音がしたような気がしたが、その瞬間に、允子は急に、

「ああん！」

と、とてつもない声をはり挙げたと思ったら、いきなり昌二郎のからだにぴったりしがみついてしまった。しがみつくと同時に、下あごのあたりを、ぐいぐい彼の胸にこすりつけてきた。昌二郎はびっくりして彼女を見た。彼女の口のはしから、つばといっしょに血が流れていた。彼はいよいよびっくりして、クギ抜きを投げだしたまま、允子をいたわった。

「どうしたの。——痛かった。また肉をはさんじゃったの。」

「……」

「え、どうした。——ごめんね、允ちゃん、ごめんね。」

允子はなんにも答えないで、泣きながら、一層つよく彼の背なかの肉をつかんだ。

と、何かわからない力が、昌二郎の体内にわきあがった。彼の両うでは、突然彼女の肩をぎゅっと締めつけた。そうしたら、允子は前よりももっと声をはり挙げて、ほおをすり寄せてきた。すり寄せられると、昌二郎はいよいよ堅く彼女をだき締めた。

うしろの松のこずえでは、あい変わらず油ゼミが鳴きしきっていた。

緑の草の上には、ちいさい白い、とんがったものが、水晶のように光っていた。

三

それから二、三日のちのことだった。允子は口のなかに指をいれて、昌二郎のうちのほうへ遊びにいった。歯を抜いたあと、そこのところから、口のなかに風がすうすうはいるので、彼女の指はいつのまにか、そのすきまにはさまってしまうのだった。

彼の家のそばの、かきねの近くまでくると、

「允ちゃん。」

と、昌二郎の声がどこからともなく飛んできた。彼女はあたりを見まわした。しかし昌二郎はどこにもいなかった。

「允ちゃん。」
　また声がした。しかしいくら探しても、どうしても見つからなかった。
「どこ、昌ちゃん。――どこに隠れてるの。」
「ここだよ。ここだよ。」
　枝をかさかさ動かす音がしたので、允子にもやっとわかった。かさなったビワの葉のうしろに、昌二郎のイガグリあたまが、リスのようにちょっぴり見えた。
「なんだ。そんなところにいたのか。」
「允ちゃん。手をだしなよ。」
　シャツ一枚で登っている昌二郎が、木の上から叫んだ。
「なんだい。」
「ビワをやるよ。」
「ビワ？」
「うん。」
「もうたべられる。」
「たべられるとも。うまいぜ。手をだしといでよ。今もぎってやるから。」
　昌二郎はうまそうなのをひと枝もぎって、ぽうんと下に投げた。しかし允子は取ろうともしなかった。
　黄いろい果実は、乾いた土の上でぐちゃぐちゃに割れて、なかみを見せたままころがっていた。
「どうして取らないの。」
「あたし、こじきじゃないよ。投げたものなんかいやだ。」
「そんなこといったって、うまいんだぜ。とても水があるんだよ。」
「いらないったら。」
「ふん！　いばってやがら。口んなかに指つっこんでるくせに。」
　允子ははっとして指をだした。
「だって抜いたあとが、歯を抜いたあとが、へんなんだもの……」
「やあい、歯っかけばあさん！　歯っかけばあさん！」
　急に木の上の子どもが、はやしだした。
　と、允子は昌二郎の登っている木に、やにわに飛びついた。
「おい、いけない。そんなとこで木を動かしちゃ……」
「動かすんじゃない。あたしも登るんだよ。」
「登る？　允ちゃんなんかに登れやしないよ。」
「昌ちゃんに登れるんなら、あたしにだって登れるよ。」
　彼女はするすると登りはじめた。
「おてんばだね。允ちゃんは。女のくせに。」
「おてんばだっていいよ。」
　彼女は少し登りかけたが、その上の枝に手がとどかないので、それから先がなかなかうまく進まなかった。
　昌二郎はそれを見ると、上からおりてきて、允子にやさしく手をのばした。
「允ちゃん、これにつかまんなよ。引っぱってやるから……」
「いいよ。そんなことしてくれなくったって。」
「強情だな、いいからつかまれったら……」

允子の目のなかで何かが動いた。彼女は何もいわずに、彼の手にぎゅっとつかまった。からだがひとりでに上に伸びた。彼女の左の手は、やがてすぐ上の枝をつかんだ。

四

大きなビワの木の、なかほどの左の枝に、昌二郎がまたがり、右の枝に允子が腰をかけていた。ふたりは、一本の木の両がわにならんで、熟した実をえり取っては、うまそうにたべていた。その横のスギの木から、ビワのほうに、にゅうと突きだした枝の先には、これも仲よくカタツブリが二匹、つのも動かさずに、ちょこなんとのっかっていた。

家のものは野らに行ったと見えて、あたりには人の声もしなかった。ただ、ふたりがたべては落とすビワの種が、土の上ではね返る音だけが、ま昼の静けさを破っていた。

日は照り、野は輝き、風は軽かった。

道ばたの横の小川のはしで、ガチョウが三、四わ、がああが何か立ち話をしていた。

水の上を縫って、ヨシキリが一わ、すうっと飛んだ。

ビワの実のうれた甘いにおいのなかにあって、ふたりは、これが幸福というものだ、ということも知らないほど、無心に、黄ばんだ木の実を口に運んでいた。

どこかのおっさんが、はだか馬を引っぱって木の下を通った。允子はその馬のしりに、ビワの種をぶっつけた。しかし、馬はうしろ足をちょっとあげただけで、「ひいん。」ともいわなかった。

「待って。おれ、あの耳にぶっつけてやるから。」

「耳に？　耳になんか当たりゃしないよ。」

「当たるさ。きっと当てて見せら。」

昌二郎はそういって、ビワの種を握ったまま、じっとねらいをつけていた。やがて彼はほうったけれども、ビワの種は馬の耳には当たらないで、馬を引っぱっているおっさんのスゲガサに、ばちゃんと当たった。

「だれだ。」

おっさんは、うしろをふり返ってにらみつけた。

允子はその声に驚いて、急に太い幹のうしろに隠れてしまった。

「悪さするときかねえぞ。」

おっさんはまたどなった。

繁った葉のうしろに、ちいさくなっていた昌二郎は、その声にいよいよこわくなったのか、幹につかまったまま、ぐるっとそのうしろがわにすべって、允子の背なかのほうに寄ってきた。そうしてできるだけ身を隠そうとしてあたまを縮めながら、彼女のうしろにぴったりひっついてしまった。

「痛い！　そんなに押しちゃ……」

「しっ！　黙って。」

昌二郎はのどの奥のほうでたしなめた。

そのあと、おっさんの声は聞こえなかった。昌二郎は允子の肩のうしろから、こわごわ首をあげて見た。もう、おっさんも馬も見えなかった。

「痛いったら、何するの。」

「なんにもしてやしないじゃないか。行っちゃったかどうか、見ただけじゃないか。」
「だって、クギのようなもんで突っつくんだもの。」
　允子も道のほうを見たあとで、ぷんぷんしながらいった。
「クギ？　おら、そんなもの持ってやしないよ。」
「でも今、細い、とんがったもんで、背なか突っついたじゃないか。」
　昌二郎は、思わず胸の隠しに手をやった。なるほど、ちいさい、とんがったものがそのなかにはいっていた。彼は一生懸命に隠れようと思って、允子のうしろにまわり、彼女の背なかにひっついていたから、からだがすれたひょうしに、自然、そいつが允子の背なかを刺したものにちがいない。
「なんだ。こいつか。」
「何よ。何もってるの。」
　允子はもとの枝にもどって、昌二郎の顔を見あげた。
「なんだっていいじゃないか。」
　男の子は、少しきまりが悪そうに、横のほうを向いてしまった。

五

「いけないったら。」
　向こうのことばにおっかぶせて、允子はいった。
「ほんとうに、なにもってるのよ。――なんで突っついたのよ。」
「なんだっていいじゃないか。」
　昌二郎は同じことばをくり返すよりほかはなかった。
「そんなって、……人を突っついておきながら、ずるいや。――見せてよ、なんだか。よう、昌ちゃん。」
　しかし昌二郎は、ことさら隠しの上に手をあてて、わざとなかのものを見せまいとした。すると允子はやっきになって、ぐいぐい昌二郎のシャツを引っぱり、むりやりに隠しのなかに指を突っこんでしまった。昌二郎は、見せまいと思えば、いくらでも見せないですんだのだが、木の上なのであんまり争うとあぶないものだから、しまいには、允子のするままに任せていた。
　允子は隠しのなかのものを取りだして見て、あまりに予期しないものだったのに驚いた。
「なんだ。こんなもんか。」
「……」
「これ、こないだのじゃない。」
「……」
「ばかね、昌ちゃんは。こんなもの持ってるなんて。」
「ばかだっていいよ。」
「それに、きたないじゃないの、こんなもの。」
　そう言いながら、彼女はちいさいとがったものを、ぽうんと地面にほうり投げた。
「なんだって捨てちまうんだい。」
「きたないからさ。」
「きたないったって、あれはおれのもんじゃないか。」
「おれのもん？　あんなこといってら。あれはあたしの歯じ

ゃないか。」
「もとは允ちゃんのだって、おれが抜けばおれのもんじゃないか。」
「へえ、昌ちゃんが取ったんだから、昌ちゃんのもん、そうお？」
允子は口をとんがらせて、そういったかと思うと、急につるつると幹をすべり始めた。
「あぶない。そんなふうにおりちゃ……」
昌二郎が言った時には、允子は一ばん下の枝のところから、ぽうんと地上に飛びおりた瞬間だった。彼女は飛びおりると、ちょっところがったが、すぐ起きあがって、かけだして行った。ちいさい、とんがった歯は、乾いた土の上できらきら笑っていた。
彼女はそれを取りあげると、ビワの木のほうにもどってきた。その時、昌二郎も幹をおりかけて、ちょうど一ばん下の枝まできたところだった。
「はい。」
微笑しながら、允子は拾った歯を昌二郎のほうに突きだした。昌二郎は半ぶん手をだしたが、すぐ引っこめた。
「さあ、昌ちゃん、返すよ。」
昌二郎は允子のほうを見ないで、そっと受け取った。允子も昌二郎の顔を見なかった。見なかったけれども、何か知らないものが、からだのなかをすうっと通り抜けて、指の先がぶるっとふるえた。
「おかしな人。こんなものがいいなんて。」
彼女は下を向いたまま、小いしを一つ拾った。そうして、りょう手で軽く包んで、なんというわけもなしに、ころころと振った。そうしたら、昌二郎も木の上で、糸きり歯を手のひらのなかに入れて、同じようにころころと振った。
允子はひとりでに「ぷっ。」と吹きだした。
昌二郎も「ぷっ。」と吹きだした。
横の小川で、ザコが一匹ぴょんとはねた。

婚約のゆび輪

一

「どうしてあなたは、そうわからないんでしょうね。いつまでもわからないことを言っているんなら、おかあ様はもうかまいませんよ。」
母おやにそうきめつけられても、允子はやっぱり泣きやめなかった。彼女は母のひざにだきついたまま、しゃくりあげていた。
「あなたがなんといっても、あれだけはだめなの。あれは、おねえさんしか持てないものなんですから、あなたがいくら泣いてもあげられません。」
「……」
「まあ、あなたという人は、どうしてそう強情なんでしょう。さ、もう泣きやめなさい。きっぱりと泣きやめなさい。
——あんな大きなゆび輪、あなたが持ったって、どうにもな

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c